

ストーク・マンデビル・スタジアム

～障害者スポーツについて～

報告者: 岡本 和徳

1. 概要

- スタジアムはストーク・マンデビル病院国立脊髄損傷センターの所長であった Ludwig Guttmann (ルートヴィヒ・グットマン) 医師によって Stoke Mandervills に設立され、この地で 1948 年の第一回目のパラリンピックが開催された。
- 現在では体育館、トレーニングジムなどを中心に、障害のある人もない人も使える設備を整えることにより、おもに身体に障害の有無にかかわらない施設運営が WheelPower という民間団体などにより行われており、障害者スポーツの聖地とも呼ばれている。

2. 説明者

ポール ラシュトン 氏



Mr Paul Rushton

3. 主な説明内容

Stoke Mandervills は人口 5000 人で周辺には人口 6 万人規模の町があり、2016 年のスタジアムへの来場者は 10 万人ほどで、地元の人たちがのべ 5 万人ほど来場しており、残りの

5万人ほどは地域外の人たちである。

施設の目的は、主に身体障害者の人たちが積極的に社会参画できるようにすることであり、この施設の利用については障害の有無にかかわらず、利用できるようになっている。

施設の利用は、利用者が会員登録し毎月の会費を支払うかもしくは毎回の使用料を支払うことで利用が可能となる。障害のある人には利用割引がおよそ30%オフとなっている。

経営と運営は別団体が行っている。経営は Wheel Power と呼ばれる慈善団体でもあり保証有限責任会社がおこなっており、運営は別のマネージングカンパニーが行っているとのことであった。

施設の経営はおもに利用者の利用料に依っている。健常者が施設を利用する際に支払う利用料が年間で200万ポンドほどある。さらに Wheel Power への寄付や Wheel Power が企画する様々な障害者スポーツイベントなどに対するチャリティーで年間およそ100万ポンドの資金を調達することができており、これらが主な運営資金となっている。また、行政からの補助金などはほぼ皆無だが、15年前にスタジアムの建て替えに要した1020万ポンドのおよそ半分を国に補助してもらっているほか、地方税の税率が50%減税されている。

施設全体がアクセシビリティーの高い構造となっており、健常者も障害者も使いやすい構造になっている。これは法律の要請でもあり、制度としてバリアフリーなどを実現している。施設内の運動器具は健常者、障害者の両方が使える設備が用意してある。例えば筋力トレーニングに使うマシンは、シートを横へ動かすことができる仕組みになっており、車いすに座りながら上半身のトレーニングができるようになっている。さらに、スイミングプールにおいては、車いすの人が自分でプールに入れるように、プールサイドに専用の移動シートがあり、それを利用することで水中に身を入れることができる設備がある。そのほか、建物内には段差がなくバリアフリーであることや更衣室やシャワーなども車いすで利用することが可能となっている。陸上競技場、テニスコートなども車いすのまま利用することが可能。



シートが移動し、車いすのままマシンが利用できる



さらに、この施設の立地する場所で第一回目のパラリンピックが開催されたということもあり、これまでのパラリンピックの聖火リレーで実際に使用されたト

一紙が保存されており、それを地元小学校の子供たちに見せたり触れさせたりすることで障害者スポーツ、パラリンピックに対する子供たちの興味を引き出し、参加意識を高めている。

東京でのパラリンピック開催は2回目となるが、これは世界でイギリスと日本だけが2回目の開催をすることになっており、当地の人たちも期待しているとのことであった。



4. 主な質疑

○ ここに所属クラブはあるか？

→ ない。健常者も障害者もここを拠点にしている一般のチームはたくさんあるが、所属チームというのではない。ここを拠点にしているチームは健常者よりも30%安く使える。

○ 事務の利用状況はどうか？

→ ジムの会員は毎月2200人いる。200人が障害者。
年間1300人の子供がプールに来るがほとんど健常者

○ パラリンピック参加ナショナルチームの強化などの支援をしているのか？

→ ナショナルチームにコーチがいるので、スタジアムが関与することはない。
今日では多くの場所で障害者でも使える施設が増えているため、わざわざここまでみんながくるということはない。
男性の車いすバスケットボールチームがここを使うのは、コーチが近くに住んでおり、空港が近いから。

○ ヨガの教室はあるか？

→ ヨガはやらない。ダンススタジアムはある。

○ 健常者と障害者が一緒に利用できるための取り組みと課題はあるのか？

→ 障害者の大きなイベントが入った時には健常者のイベントをキャンセルする必要が出てくるが、それは一般の方の理解を得ているのでうまくいっている。

○ 行政とのつながりは？

→ 土地は国の所有。建物は自分たちの所有物。借地権で運用している。財政補助はない。

イベントなどのつながりはある。
50%減税してもらっている。本来は
チャリティー団体に対しては 20%
減税だがここは施設を提供してい
るので 50%減税となっている。



○ イギリスの中でこの施設の最も進
んでいる点は？

→ 全国にナショナルセンター3 つあ
るが、ここは障害者に優しい宿泊施
設 350 床あること。

○ 施設運営に係る課題について？

→ 課題はチャリティーに要する資金調達や障害者でスポーツしたい人を見つけていくこと
が課題である。

○ 今後のビジョンについて

→ 将来的にはスポーツホールを増やしたいし宿泊施設を大部屋のようなものではなく、ホ
テルのようにきれいにしたり、障害者が使いやすい設備を増やしたい。
来年全国パラリンピックヘリテージセンターを作る予定である。

○ 文化イベントで障害者がかかわったもので最も効果があったのは？

→ ここで聖火に火をつけた。2016 年のリオオリンピックのときもここからスタートした
障害者 100 人がダンスイベントを開催した。

○ 男女の参加比率が同じになるような取り組みはあるか？

→ 宗教上の理由などにより、イスラム教徒の女性だけで開催するグループは作りたい。

5. 所感

この地がパラリンピックの発祥の地となっていることにより、障害者スポーツの聖地とな
っていることが、少なくともスタジアムで働く人たちの自尊心を高め、高い誇りを感じてい
るように思えた。その誇りの高さがスタジアムで働く人や、携わる人たちの心を醸成しさら
に障害者に優しい心と振る舞いになり、町全体が障害者スポーツの聖地という空気を作っ
ているのではないかと感じた。

近年では、イギリスの法律も整い障害者に対する理解も高まってきたので、このスタジア
ムのような施設は多くあるとのことで、特にこの施設が極めて優れているということではな

いようだが、ここと同じような施設が国に多くあるということに彼らは喜びを感じているようだ。

特に興味を引いたのはその運営が Wheel Power という慈善団体、保証有限責任会社が行っているということであった。Wheel Power は70年にわたって身体障害者にスポーツの機会を提供しており、今ではチャリティイベントとして寄付を目的としたさまざまな文化・スポーツイベントを通して資金調達しているほか、帰国後の調査で独自の宝くじを発行することで資金を調達しスタジアムの運営などを行っていることが分かった。



イギリスにおいても国家の財政難は共通するところあり、この Wheel Power の存在により障害者スポーツが支えられているところは民間の強さを感じるところである。特に独自の宝くじ発行による資金調達は興味深い取り組みであると感じる。

京都においても健常者、障害者にかかわりなく、一つでも「聖地」と呼べる競技があることが望ましいと思う。聖地を作ることにより、全国から競技者や関係者が集まり、地域の誇りを醸成することにつながるのではないかと感じる場所である。